

巻頭言

2007.3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

親の脳力

茗溪塾塾長 宇野雅春

先日、韓国でびっくりするようなある放火事件がありました。有名進学校の高校生2人が「勉強したくない」という理由で深夜、学校に火を放ったというものです。監視カメラにその時の2人の姿がはっきり映っていて、すぐ逮捕となったわけなのですが、それに付随して、韓国の「学歴社会」の実情が紹介されていました。受験最終盤ということで、その進学校では、朝7時から夜遅くまで、学校で学習が行われていたということでした。

塾通いも激化していて、年々エスカレートしているという状況が報道されていました。

この波は、急成長を続けている隣りの中国でも同様のようで、先日某雑誌で見たのは、中国での就職活動での学歴偏重の様子です。大学のレベルでシビアに線引きされていて、一定レベルに達しないと「採用」から完全に除外されている様子が書かれていました。

つい最近までは日本も同じ状況でしたが、今は少し変化してきています。今騒がれている「格差社会」の根底には、学歴=身分という図式の変化が見逃せません。フリーター率の統計を見ても、有名大学を出れば安心という状況はどこにもないことが分かります。

いわゆる社会適応の力（コミュニケーション能力）がなければ、有名大学をでて、社会ではやっていけない時代に日本では突入しているということです。国際競争と同時に国際化社会が進み、優秀な人材が世界規模で獲得できる時代が来れば、この競争はますます熾烈なものになってくると思います。では、自分の子供に、何を準備していけばよいのか？ということになりますが、考えれば考えるほど、そう簡単なことではないと思います。

30年近く塾という「受験」の最前線にいて、ずーっと現役教師としてたくさんの生徒を指導し、そして送り出し、最初の教え子達が既に40歳をこえて、社会の中堅に差し掛かっているのを見てきながら、どうしても、「受験」ということの中にも本来の社会に役立つコミュニケーション能力の育成の要素があるはずだと思ってしまいます。

「受験」を単なる競い合いと考え他人に負けるな！と競争をあおるだけの指導もダメだと思うし、かといって「受験」のそうした悪い局面ばかりを見て、「受験」自体を害悪視するのはもっと悪いことだと思うのです。

この度、20年近く書き続けてきた私の「教務便り」のメイン文章が、冊子として出版されることになりました。その時、その時で感じたことを思うがままに書き綴ったもので、そんなに気負って書いたものではありませんが締め切りに追われながら一心に書き綴った文章の中に、「受験」についての私特有の考え方があり、自分の子供の受験も体験しながら、生徒指導をしつつ実感を綴ったものだけに、共感を寄せてくれる方々も多かったと思います。受験を親が直観的にどうとらえるのか？同時にそれを自分の子の実情にどう合わせてどう対処するのか？そしてぶつかる様々な問題をどう解決していくのか？最近言われている「右脳」的な力も「左脳」的な力も両方必要ということになるかもしれません。

いわば親の「脳力」ということ。

「昔のように、厳しくしろ！」とかいう論議もできそうな昨今の風潮ですが、私は時代を捻じ曲げるような指導方向はいずれ長持ちしないと考える立場です。携帯電話は害になるから使わないとか、TVは見ないとか、時代に逆行する流れはことごとく打ち砕かれていくからです。今の時代を嘆くばかりなのもちょっと賛成しかねます。この時代の「受験」をいかに子供たちの「成長」に結び付けていけるのが課題と考えるからです。塾はそこから逃げて仕事はできませんのでいつもそればかりを考えてきたといえます。全てうまく言っていると自画自賛するほど思い上がってはいませんが、時代を受け入れていくのも「脳力」の一つです。大人に必要なのはそれ+子供を理解する「脳力」です。

韓国での放火事件は「受験」を競争と考えるところから派生してくる問題です。放火した高校生は明らかにその競争の敗者であり、自分がダメなら皆も道連れに！なる気持ちだったかもしれません。

にだけは負けるな！」とか「一番上がれ！」とかいうことと、受験に合格していくこととは全く違う次元の問題です。子供たちの方が、皆で頑張り、皆で喜び合うということの大切さを素直に受け止められる「脳力」を持っています。

塾も親も今、そうしたことを考える力を要求されているように思います。